平和への思い

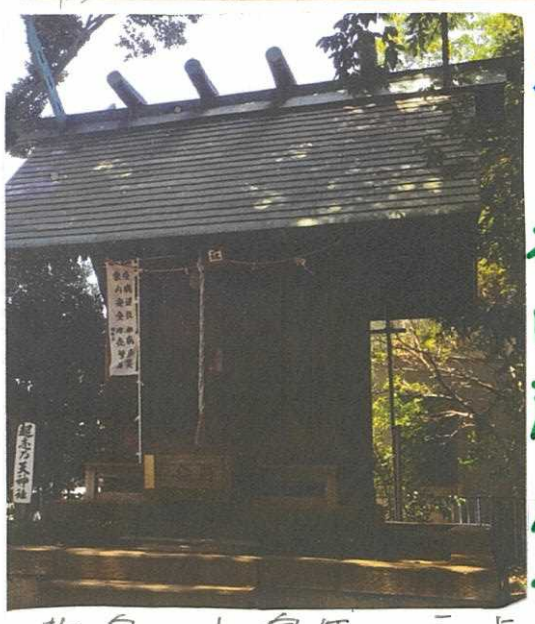
子ども平和新聞

9歳の頃の記憶

北本市立東小6年
宮下 南珠那
北本市立南小6年
福島 千紗 千竹 陽翔
きいたま市立上尾小6年
立花 柚葉
越谷市立大間野小
5年 吉川 結衣

木内さんは、9歳、小学4年生の時に被爆されました。とつぜん周りが光り、真っ暗になりました。夜が明けるように次第に明るくなりました。建物が全てこわされていて、木内さんだけがそこの中にいました。「友達もいない、何が起きたか理解できなかった」と話していました。それでも「家に帰らなきゃ」と思ったそうです。右の額と足くびにこぶができただけで助かった木内さんは自分がなぜ生き残っているのかも分からなかったそうです。今、きいてみると「今の自分でも分からない」と語っていました。80年前の原子爆だんの被害を負った人について、「あの日以来、生き残って受けた身体の傷も、心の傷も深く、いつまでも苦しみを味わってきたことは同じだと思っています。そして、今の戦争の歴史を後世に伝えることが重要で、本当の平和を守りぬき、もう二度と苦しみをくり返さないことが大切だと思います」と伝えています。（宮下）（平井）

平和を語る木内さん



天皇を大事にした奉安殿

奉安殿の様子

起志乃天神社では、昔天皇を大事にしなさいと伝えられ、小学校に行く前に通ったら、きちんとかかとをそろえて90度でおじぎをしようと小さい頃から教えられていたそうです。

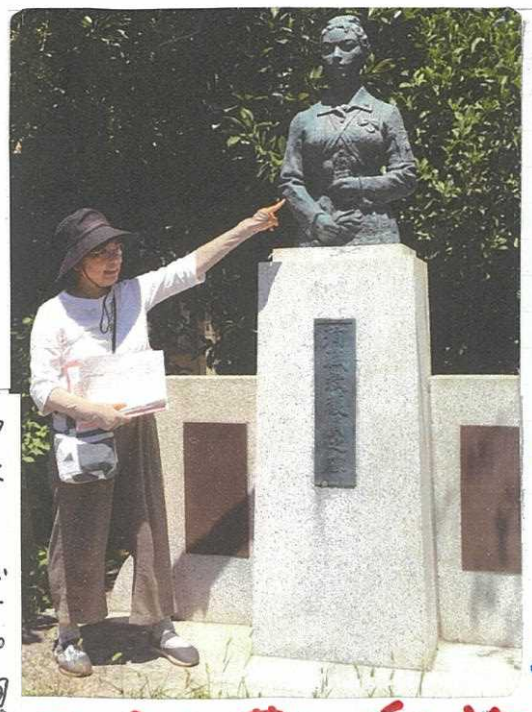
高砂小から1946年に移築し、起志乃天皇神社の本殿となりました。

奉安殿の中には、天皇后皇の写真、約束事教育勅語などが入っていました。

現在は、写真などはなくお守りが入っているそうです。

奉安殿では、火事があれば学校の校長先生が天皇后皇の写真、教育勅語をもち出していたそう出す。（立花）

たくさんの命を救った



殉職救護之碑の様子

殉職救護員の碑は、てき味方問わずたくさんの人の命を救った殉職救護員をたたえてつくられました。救護員とは、戦傷病者の手当てをしたかんご師のことです。埼玉県では、32人が仕事中に亡くなったそうです。殉職救護員の碑の文章に書かれている「博愛人道」は、赤十字社の精神で像にも赤十字のマークがありました。生きて帰ってきた救護員も、たくさんの苦しい思いをしてきたので、戦争はしてはいけないことだと思いました。（福島）

コラム

ぼくは戦争はよくないと思います。理由は、戦争がおきると家はブチャブチャになり死体だらけになってたくさんの人がたおれています。

木内さんの話によると広島にくらしかうがおきて学校にばくだんがおちてきたのくうしゅうけいほうがでてそれがかいじょされたその日木内さんは、おかのやさんがあるぶんごうに行ってそこでのそんびそのときにぴかっと光って木内さんはきぜつしたのにがけるとまわりの友達はいなくなっていたぴ自分がそうなったらとてもかなしいです。木内さんはすわっていたら木内さんの名前をよんでいる男の人とれなん所にげた。そこで木内さんのお母さんにあいいっしょにさた男の人はお兄さんだということがわかって、そのあと茨城に行ってそこですごしました。戦争をするとたくさんのんがなくなるので戦争をするとよくないと思いました。（吉川）